



『ロビンソン・クルーソー』と貸借対照表：ダニエル・デフォーの簿記論研究（高田正淳博士記念号）

中野，常男

(Citation)

国民経済雑誌, 170(5):65-91

(Issue Date)

1994-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00175096>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00175096>



『ロビンソン・クルーソー』と貸借対照表

— ダニエル・デフォーの簿記論研究 —

中 野 常 男

...Man is a creature so formed for society, that it may not only be said that it is not good for him to be alone, but 'tis really impossible he should be alone....

Defoe, *Serious Reflections of Robinson Crusoe*, 1720.¹

I

イギリスの歴史を描いた古典と考えられる George M. Trevelyan の『英国社会史』(*English Social History: A Survey of Six Centuries Chaucer to Queen Victoria*, 1942) は、14世紀から16世紀にかけてのイギリスの社会史を18の章に分けて記述している。その著作の中で、Trevelyan は、多くの章の標題に、例えば、「チョーサー時代のイングランド」(Chaucer's England) とか、「シェークスピア時代のイングランド」(Shakespeare's England) というように、それぞれの時代を代表する人物の名前を付している。²

では、イングランドがスコットランドと合併して、今日のイギリス、つまり、「連合王国」(United Kingdom) が形成された18世紀初頭は、いったい誰によって代表されているのであろうか。Trevelyan は、Daniel Defoe (1660～1731) をその時代の代表的人物とみて、該当する章に「デフォー時代のイングランド」(Defoe's England) という標題を与えている。³

いうまでもなく、Defoe は、わが国では、『ロビンソン・クルーソー』(*The*

1 Defoe [1720], pp. 11-12.

2 Cf. Trevelyan [1942] (藤原・松浦訳 [1971]; 松浦・今井訳 [1983]).

3 Trevelyan [1942], Ch. X (松浦・今井訳 [1983], 第10章).

Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, 1719) の著者として有名である。おそらく大部分の人達は、この Robinson Crusoe という架空の人物の漂流譚を、年少の頃に子供向きに改作されたダイジェスト版を通して読まれた記憶があろう。否、むしろ年少の頃にダイジェスト版を読まれただけで、成人してからこの小説を本格的に読まれた方は少ないであろう。大人になって、この小説を真剣に読み返しているのは、英文学者や経済学者など、全体からみればごく限られた数の人達だけかもしれない。⁵

II

もっとも、経済学者の間では、『ロビンソン・クルーソー』は、それが別名「小説化された経済学」⁶ともいわれるように、Crusoe が、自ら「絶望の島」(the Island of Despair)⁷と名づけた孤島において、過酷な条件下にもかかわら

4 なお、『ロビンソン・クルーソー』の物語は、実際には、本文中に掲げた(1) *The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner* (London, 1719) 以外に、(2) *The Farther Adventures of Robinson Crusoe, being the Second and Last Part of His Life* (London, 1719), さらに、(3) *Serious Reflections during the Life and Surprizing Adventures of Robinson Crusoe: with His Vision of the Angelick World* (London, 1720), 計三つの著作から構成されている。

このうち、もっとも有名なものは、いうまでもなく、(1)の *The Life and Strange* ……であり、それは、1719年の4月に出版されるや、早くも8月には四版を重ね、19世紀末までには七百版以上が出版され、世界のあらゆる言語に翻訳され、聖書に次ぐベスト・セラーとさえいわれている(天川 [1966], 84-85頁)。

なお、『ロビンソン・クルーソー』三部作について、本稿では、George A. Aitken 編集による Defoe の著作集 *Romances and Narratives by Daniel Defoe* (London, 1895) 所収のもの (Vols. I~III) を利用している。

5 とはいえ、例えば、John A. Stoler 編集の文献目録 (*Daniel Defoe: An Annotated Bibliography of Modern Criticism, 1900-1980*) によれば、Defoe の著作については、『ロビンソン・クルーソー』に限定しても、きわめて膨大な研究文献が公表されている (See Stoler [1984], pp. 123-180)。

また、Frank H. Ellis は、『ロビンソン・クルーソー』に関して、Karl Marx や Virginia Woolf など、さまざまな論者によって提起された解釈を集めた興味深いアンソロジー (*Twentieth Century Interpretations of Robinson Crusoe*) を編集している (Ellis (ed.) [1969])。

6 天川 [1966], 111頁; see Novak [1962], p. 66.

7 Defoe [1719a], p. 76 (平井訳 [1967], 98頁)。

ず、彼の経済生活をきわめて合理的かつ組織的に建設するところから、この小説の中に、近代的人間の性格である「経済人」(homo æconomicus)の人間像、具体的には、産業革命前夜のイギリス経済の根本を支えた「中産の生産者層」——Defoeが語る「中くらいの身分」(middle station of life)⁸——の思考・行動様式の理念像がユートピア的に描き出されているとみられるなど、その叙述に含まれた経済学的意味がさまざまな視角から読み取られている。⁹

しかしながら、ここでは、上記のような経済学的観点からする考察については優れた先人の業績に委ねることにして、筆者が専攻する会計学、特に会計史の側面からこの Defoe の小説を少しながめてみることにしたい。

『ロビンソン・クルーソー』の中で会計史的に興味深いところは、難破の後、運よく打ち寄せられた「絶望の島」での生活を送る過程で、Crusoeが、「自分の今の事態」(the state of my affairs)を書き記し、「できるだけ我とわが身を慰め、良い点 (the good) と悪い点 (the evil) とを並べてみて、へたするともっと悪い場合もありうることを知るよすがにしよう」と思い、「自分がめぐまれている有利な点」(the comforts I enjoy'd)と、「苦しんでいる不利な点」(the miseries I suffer'd)とを、以下に掲げるような様式によって、比較・対照している箇所である。¹⁰

悪い点

- ・私はおそろしい孤島に漂着し、救われる望みはまったくない。
- ・私は全世界からただ一人除け者に

善い点

- ・しかし、他の乗組員全員が溺れたのに、私はそれを免れてげんにこうやって生きている。
- ・だが自分一人が乗組員全員から除

8 Defoe [1719a], pp. 2-3 (平井訳 [1967], 12-13頁)。

9 わが国において経済学的観点から『ロビンソン・クルーソー』を考察した代表的論稿としては、大塚 [1966a] ; [1966b] ; [1977] 等が挙げられる。そして、これら一連の論稿においては、「経済人」Crusoeの思考と行動の様式が、当時のイギリスの「中産の生産者層」の理念像を反映するものとして、社会経済史的背景をふまえながら詳細に論及されている (See Novak [1962], Ch. III)。

10 Defoe [1719a], pp. 71-72 (平井訳 [1967], 93-94頁)。

され、いわば隔離されて悲惨な生活をおくっている。

・私は全人類から絶縁されている孤独者であり、人間社会から追放された者である。

・身にまとうべき衣類もない。

・私は人間や獣の襲撃に抵抗するな
んらの防御手段ももたない。

・私には話し相手も、自分を慰めてくれる人もいない。

外されたからこそ死を免れたのだ。
奇蹟的に私を死からすくってくれた
神は、この境遇からもすくいだすこ
とができるはずである。

・だが、食うものもない不毛の地で
餓死するという運命を免れている。

・だが、さいわい暑い気候のところ
にいる。ここでは衣類があってもま
ず着ることもできまい。

・だが、私がうち上げられたこの島
には、たとえばアフリカの海岸でみ
たような人間に害を加える野獣の姿
はみられない。もしアフリカの海岸
沖で難破していたとしたら私はどう
なっていたであろうか。

・だが、有難いことに神が浜辺近く
船をおし流してくれたため、多くの
物資をとりだすことができた。これ
だけあれば生きているかぎり自分の
必要をみたすこともできるし、また
なんとか必要なものを手にいれるこ
ともできる。

このように、Crusoe は、会計で用いられる貸借対照表の様式を借りて、つまり、小説中の言葉でいうならば、「借方と貸方」(debtor and creditor) という形式合理的な計測方法に拠りながら、自己の境涯を「公平に」(impartially)

分析している¹¹。

そして、彼は、自ら書き記した上掲の対照表から、「この世のなかでまたとないと思われるほど痛ましい境涯にあっても」、「そこには多かれ少なかれ感謝に値するなにもものがある」(there was something *negative*, or something *positive*, to be thankful for in it), つまり、「良いことと悪いこととの貸借勘定ではけっきょく貸し方のほうに歩がある」(to set in the description of good and evil, on the credit side of the account) ということ¹²を悟るのである。

もちろん、ここにみられる対照表は、今日の企業会計で用いられているような借方に資産、貸方に負債と資本をそれぞれ貨幣表示により掲記した貸借対照表ではなく、事柄の性質上、あくまでも Crusoe が置かれた境涯からみての「良い点」(the good) と「悪い点」(the evil) とを言葉で比較・並記した単純な表にすぎない¹³。

しかし、それにしても、小説の中で、単なる言葉による叙述的描写ではなく、簿記という形式合理的な計測方法を具現した貸借対照表——しかも、通常の貸借対照表とは掲記される項目が貸借逆転したイギリス式貸借対照表¹⁴——の様式を借りて、「絶望の島」における Crusoe の境涯を、客観的かつ効果的に描写しようとするアイディアの発露に、作者である Defoe が有した並々ならない会計知識をうかがい知ることができるであろう。

11 Defoe [1719a], pp. 71-72 (平井訳 [1967], 92頁)。

このような自己の生活について「貸借対照表」を作成するということは、当時プロテスタントの人達の間で「信仰の記帳」という形で既に行われており、Crusoe もまた、その思考的伝統を受け継いでいるとされる(大塚 [1977], 48頁; see 天川 [1966], 389頁)。

12 Defoe [1719a], p. 73 (平井訳 [1967], 94頁)。

13 See Parkinson [1986], pp. 45-47.

14 今日の貸借対照表は、一般に、借方側(左側)に資産を、貸方側(右側)に負債と資本をそれぞれ掲記する様式を採るが、これと貸借逆転した様式を採る貸借対照表を特に「イギリス式貸借対照表」という。そして、その原型は、たとえば、Vahe Baladouni によるならば、イギリス東インド会社(正確にはロンドン東インド会社)の第三次合本(Third Joint-Stock)に際して、1641年7月に作成された報告書——残高勘定(balance of accounts)——に見出されるといわれる(Baladouni [1986], pp. 25-28 (Exhibit B); cf. Sainsbury [1932], pp. 69-70)。

III

Daniel Defoe (Daniel Foe)¹⁵ は、ピューリタン革命とそれに続く共和制の時代を経験した後の王政復古の年、1660年に厳格な清教徒（非国教徒）であり、肉卸売商組合（Butchers' Company）の構成員であった James Foe の子として生まれた「生粋のロンドン子」である。彼は、非国教徒としての宗教的雰囲気が濃厚な家庭で育ち、教育も非国教徒専門学校であるモートン・アカデミー（Morton's Academy）で受けたが、牧師とはならず、メリヤス卸売商として実業界に入る。商売は繁盛し、販路を海外にまで拡張するとともに、ブドウ酒・タバコ輸入商、船舶共有者、個人保険業を営み、後には羊毛、チーズ、塩の商人ともなっている。また、煉瓦・オランダ棧瓦製造業を営み、産業資本家としても成功を収めている。もっとも、メリヤス卸売業は、彼が政治・国事に心を奪われたため、商売がおろそかになり、多額の負債を残して倒産するなど、彼は実業界からさまざまな経験を体得している。

Defoe はまた、時の国王 William III の知遇を得て、ガラス税会計官（Accountant for Commissioners of the Glass Duty）に任命されたり、国王のために南海征服やスコットランド問題について建言したり、議会でも対仏貿易に関する証言を行ったりしている。さらに、彼は、経済問題を中心に、政治、宗教、軍事、社会、教育問題等を論じ、中産・大衆層から好評を博した『レビュー誌』（*Review*: 1704~1713）の発行（週3回）に携わるなど、ジャーナリストとしても積極的に活動しており、「ジャーナリストの父」とも呼ばれている。

このような多彩な経験を生かして、Defoe は、晩年の本格的著作時代に至り、先に掲げた『ロビンソン・クルーソー』以外に、『モル・フランダース』（*The Fortunes and Misfortunes of the Famous Moll Flanders*. 1722）や、『ペスト』（*A Journal of the Plague Year*. 1722）といった小説、さらに、『完全なイギリ

15 彼は、1695年頃から、Foe という本来の姓に、貴族的称号である De を冠して、De Foe, D'Foe, Defoe として使用しているといわれる（天川 [1966], 57頁: see Moore [1958], p. 8）。

ス商人』(*The Complete English Tradesman*, 1725) や、『イギリス経済の構図』(*A Plan of the English Commerce*, 1728) といった経済関係の書物など、多数の著作をきわめて精力的に公刊している。¹⁶

これらの著作のうち、Defoe の経済書の主著にあたる『イギリス経済の構図』が外国貿易を重点的に取り扱っていたのに対して、『完全なイギリス商人』は、国内市場に密着した商人層、とりわけ「若いトレイズマン」(young Tradesman)¹⁷を対象に、彼らが体得すべき教訓や道徳律、経営上の諸技術などを記した、いわばその当時の経営学入門書とでもいうべき性格の書物であった。しかも、Defoe は、この『完全なイギリス商人』の中で簿記の重要性を強調するとともに、実際にその紙幅の一部を割いて簿記に関する具体的な教示を展開していたのである。¹⁸

16 Defoe の生涯 (1660~1731) については、例えば、天川 [1966] (第2章第1節~第3節) を参照されたい。そこでは、彼の生涯が、次に掲げる三つの時期、つまり、(1)商人・産業資本家時代 (1660~1703)、(2)ジャーナリスト・政府要員時代 (1704~1714)、および、(3)本格的著作時代 (1715~1731) に大きく分けて考察されている (See also Moore [1958])。

17 Defoe [1727], p. iii.

ここでいう「トレイズマン」(tradesman)とは、もっぱら国内に業務を限定する商人のことをいい、外国の商品や産物を輸入し、国内の産物や製品を輸出するという外国貿易に携わる「マーチャント」(merchant)とは区別される。すなわち、Defoe の定義によるならば、少なくともイングランドにおいては、一般に、あらゆる種類の warehousekeeper や shopkeeper は、卸売商であるか小売商であるかを問わず、「トレイズマン」と呼ばれる。その中には、grocer, mercer, linen and woolen draper, Blackwell-hall factor, tabacconist, haberdasher, grover, hosier, millener, bookseller, stationer, その他すべての shopkeeper が含まれる (Defoe [1727], p. 2)。

そして、このような「トレイズマン」が、その当時、Defoe によって、「世界中で最大であり、これに匹敵するものはない」といわれたイギリスの国内商業 (Inland Trade) に従事していた。すなわち、「大小あらゆる町に、われわれは卸売ないし小売の shopkeeper を見出すが、彼らはこれらの流通に携わり、商品を最終消費者に引き渡している。ロンドンから商品は主として大きな町に、そして、そこから再び小さな市場へ流れ、さらにもっと小さな村に流れてゆく。そのため、イングランドのすべての製品と外国製品の大部分は、もっとも小さな村や、ブリテン全島のもっとも辺鄙な所ですら見出すことができる」というように、「トレイズマン」こそが、イギリスにおける近代産業資本確立の不可欠の要件としての、国内市場の拡大に伴う流通機構の整備に重要な役割を演じたのである (Defoe [1727], pp. 214, 328; see Moffit [1925], p. 71; 山下 [1968], 51-53 頁)。

18 『完全なイギリス商人』は、本文中でも述べたように、簿記の解説書ではなく、あくまでも経営学入門書というべき性格の書物であり、簿記の解説も、全体からみれば、ごく一部 (主として)

IV

今日、もっとも代表的な企業簿記の形態とされる複式簿記は、それが長らくイタリア式貸借簿記と呼称されていたことからもうかがえるように、「おおむね13世紀初頭から14世紀末までの間に、イタリアで、商業と銀行業の簿記実務のうちに生成発展し、15世紀に体系的組織を確立した」といわれる。¹⁹

かかる複式簿記の知識が、いつ、どのようにして、イギリスに伝播したのかという問題については明確な解答を持ち合わせていない。おそらくは、13世紀末以降当時のイギリスに居留して商業・金融活動に携わっていたイタリア商人等の外国商人との接触、あるいは、スペインやネーデルラントといった海外に進出しての現地の商人との接触などを通じて、複式簿記による進んだ会計実務を知見する機会がイギリス商人にもたらされたものと考えられる。²⁰

また、複式簿記に関する世界最初の印刷教本とされる Luca Pacioli の「簿記論」(1494) に遅れること約半世紀後に登場した Hugh Oldcastle の『有益な論文』(*Profitable Treatise*, 1543) を嚆矢として次第に出版されるようになった簿記の解説書の存在も、イギリスにおける複式簿記の伝播とその漸次的な普及に大きな影響があったものと考えられる。²¹

したがって、Defoe の『完全なイギリス商人』が出版された18世紀初頭のイ

「補論」(Supplement) Ch. III) にすぎない。それにもかかわらず、本書は、例えば、Richard Brown 編著になる会計史の古典的著作 (*A History of Accounting and Accountants*, 1905) にも、書名のみ(著者不明)という形ではあるが掲げられるなど、会計史に関する文献目録には必ずといってよい程に掲出されており、このことから、本書の重要性は明らかとなる (Brown (ed.) [1905], p. 353; see also Hatfield and Littleton [1932], p. 196; Thomson [1963], pp. 211-212)。

なお、『完全なイギリス商人』の内容については、天川 [1953b] や、山下 [1978] (第3章) を参照されたい。また、同書中に含まれた簿記論の紹介としては、既に高寺 [1971] (第20章) がある。

19 小島 [1987], 19頁。

20 Winjum [1972], pp. 40-44.

21 Winjum [1972], pp. 44-45.

ギリスでは、海外貿易に携わっているような一部の大商人 (merchant) に限られるとはいえ、複式簿記が彼らの会計実務の中で利用されていたのであり²²、簿記の解説書に関しても、従来の複式簿記 (イタリア式貸借簿記) の枠組みから脱却した、その近代化と理論化を目指した優れた啓蒙的簿記書が出版されるようになっていた。²³

Defoe は、既述のように、商人としての豊富な実務経験を有しており、当然のことながら当時の会計事情にもかなり通暁していたものと思われる。それでは、このような実務経験をふまえながら、彼は、『完全なイギリス商人』の中で、簿記に関してどのような教示を展開していたのであろうか。次節以降では、主として同書第一巻 (第二版, 1727) に含まれた記述を手がかりに、トレイスマンの経営における簿記の一般的意義と、その具体的役割、そして、彼らが実践すべきとされる簿記の内容について考察することにしよう。²⁴

V

Defoe は、『完全なイギリス商人』の「序文」(The Preface) の中で、「それ

22 17世紀後半から18世紀前半にかけてのイギリス商人の会計事情、特に複式簿記を利用して会計帳簿を作成していた大商人のそれについては、Yamey [1963]; Winjum [1972] (Ch. IX) を参照されたい。

23 イタリア式貸借簿記の理論化と近代化を目指した18世紀初頭の優れた啓蒙的著作の例として、たとえば、Alexander Malcolm の『算術・簿記新論』(*New Treatise of Arithmetick and Book-keeping*, 1718) と、その改訂版にあたる『簿記論』(*Treatise of Book-keeping*, 1731) を挙げることができる (See 小島 [1987], 第15章第3節-1; 中野 [1992], 第4章-II)。

24 『完全なイギリス商人』の第一巻は、1725年に刊行されているが、翌年のはじめに再版され、さらに、同年の秋に「補論」(A Supplement to the Complete Tradesman) を付加し、若干の訂正を加えた形で第二版として出版されている。第二版は、補論を収録したこと、序文その他に著者自身による入念な改訂が加えられたことなどにより、初版に比していっそう充実したものとなっている。この第二版の評判が非常に良好であったため、Defoe は、1727年に第二巻を統編として公刊した。第二巻は、先の第一巻が主として若い商人を対象としたものであったのに対して、より多くの経験を積んだ商人を対象としたものであった。そして、同書は、その後多くの版を重ね、特に1745年の第五版は広く流布しているが、それは、Defoe の没後に著者以外の手がかなり加えられたものとみられている (山下 [1978], 99頁 (注2))。

なお、本稿での検討にあたっては、『完全なイギリス商人』の第一巻、特にその第二版 (1727) のリプリント版 (Augustus M. Kelley · Publishers, New York, 1969) を用いている。

(本書)は、若いトレイズマンにとって有益な教示を集めたものである。……もし私がここ数年の間に多くの若いトレイズマンが、ここで示されているような忠告を欠いていたために失敗しているという経験を見なかったならば、この著作は不必要だと考えたであろうし、決してその執筆に取りかかろうとしなかったであろう²⁵」と記している。

このことから明らかなように、本書執筆の大きな動機は、彼自身を含む多くの商人達の成功と失敗の経験をもとに、経験の浅い若いトレイズマン達に対して、彼らが「完全な商人」(Compleat Tradesmen)²⁶となるために必要な知識を与えることにあった。

彼はまた、トレイズマンが携わる商業そのものについて、「商売(Trade)は軽い気持ちではじめるべきではない。それはきわめて適切に『忙しくしていること』(Business)と呼ばれる。なぜなら、それは一生忙しくしていること(一生の仕事)(business for life)であり、人生の重要な仕事の一つとして従事されなければならないからである。……商売は働くべきものであって、遊ぶべきものではない。冗談で商売に手を出す人は必ず手痛い打撃を受けるであろう²⁷」と述べて、商業もまた一生を賭けて営むべき「天職」(Calling)であるという認識を示し、職業倫理上からも安易な気持ちでこれに携わることを戒めている。²⁸

では、このような商業に乗り出す若いトレイズマンが徒弟時代に修得すべき

25 Defoe [1727], pp. iii-iv; cf. [1727], p. 6.

26 Defoe [1727], p. xii.

27 Defoe [1727], p. 48.

28 天川 [1953b], 39頁。

『完全なイギリス商人』の内容は、大きく分類すれば、(1)トレイズマンが体得し実践すべきさまざまな教訓や道徳訓、(2)トレイズマンが業務を遂行するにあたり必要不可欠な経営上の諸技術、(3)当時のイギリス経済、特に国内商業の状況から構成されている。本書執筆の動機からみて、当然のことながら、(1)の本書に占める比重は大きく、勤勉 (deligence)、慎重 (prudence)、忍耐 (patience)、信用 (credit)、正直 (honesty)、節儉 (frugality)、謙譲 (modesty)、中庸 (moderation) といった、国内商業に根ざすトレイズマンにとって特に必要とされる職業倫理上の徳目が本書全体を通じて繰り返し解説されている。そして、(2)の経営上の諸技術 (簿記を含む) も、かかる徳目と一体化することによって意義あるものとされるのである (山下 [1978] (第3章第2節); see 天川 [1953b] (第4節))。

知識として、簿記は、どのように位置づけられているのであろうか。

徒弟時代、特にその後半に学ぶべき事項として、Defoe は、彼らを取り扱うあらゆる種類の商品に関する適切な判断を養うこと、親方の仕入先や得意先等に知遇を得ること、商品の仕入方法を知ることと併せて、「帳簿 (Books) に精通すること、つまり、親方の簿記の方法 (master's method of Book-keeping) を理解し習得すべきこと²⁹」を挙げている。

Defoe は、帳簿 (ないし簿記) の一般的意義について、次のように述べている。すなわち、「トレイズマンの帳簿は、繰り返し時を告げる時計のようなものであり、それは、すべての場合において、彼がどのように進んでいるか、また、世の中で彼がどのような状況にあるかを語ってくれる。それで、彼は進むべきとき、もしくは、踏み止まるべきときを知るであろう。そして、商売そのものとは言わないまでも、少なくとも彼の商売が心地よく進むかは、彼が規則正しく記帳し、自己の帳簿に十分に精通していることに依存する。もしそれらが正しく転記され、あらゆる事柄が注意深く記入されているのであれば、つまり、借方勘定 (debtors accounts——債権) が決済され、現金が常に貸借平均され、貸方 (creditors——債務) がすべて表示されているのであれば、トレイズマンは、舵なしで海上を航行する船のようなものである。彼はまったく混乱に陥って、何をしているか、どこにいるか、あるいは、富んでいるか、破産しているかがわからない。要するに、彼は、自分自身に対して自らを説明することができず、他人に対してはもっとできない³⁰」と説いている。

このように、Defoe は、帳簿が、トレイズマンの営む商業活動の経過をよく示し、彼らの意思決定に重要な情報を提供するものであることを指摘しており、海外貿易に比較して相対的に小規模な個々の国内商業 (home or inland trade) に携わる彼らにとっても、簿記に精通することがその経営に不可欠である旨を明確に表明しているのである。

29 Defoe [1727], p. 13; see [1727], pp. 6-17.

30 Defoe [1727], p. 14.

さらに、彼は、上記のような簿記の一般的意義を説いた上で、それが当時のトレイズマンの経営において果たす主たる役割が、信用取引の導入によって彼らの間で授受される信用 (credit) の管理にあることを明らかにする。

すなわち、Defoe によるならば、「トレイズマンがこの世に所有するすべてのものは、次の三つないしそのうちのいくつかに見出される。つまり、店にある商品 (Goods in the shop)、現金 (Money in cash)、外部の債権 (Debts abroad) である。店は、棚卸 (cast up) に多少の時間を要するが、いつでも第一のものを示すであろう。現金箱 (Cash-chest) と手形箱 (Bill-box) は、必要に応じて第二のものを示すであろう。転記された元帳 (Ledger) は、第三のものを示すであろう³¹」と説かれる。

このように、Defoe は、トレイズマンが所有するものを、(1)商品 (財貨) (2)現金、(3)債権 (債務) とに大別した後、特に第三のカテゴリー、つまり、外部の取引先との信用取引の結果として生じる債権 (債務) について、彼らがその情報を適切に得るためには、帳簿 (元帳)、そして、それを作成する技術的基礎としての簿記の知識が不可欠であることを強調している。³²

もちろん、「信用を伴わない商売は、簿記をまったく必要とし³³ない」といわれるように、信用を授受せず、現金のみで取引を行う商人は、帳簿を作成することなく商売をやってゆくことができる。つまり、「彼が自分の財産 (estate) を知りたいときは、店と現金 (上記の Defoe の分類でいえば、第一と第二の

31 Defoe [1727], p. 267.

32 ただし、Defoe はまた、上記のような信用取引に伴う債権 (債務) の管理という目的以外に、帳簿が果たす役割として、有形財産 (solid stock) に関する見積りの基礎として、あるいは、従業員への忠実さに対する検証手段となりうる点を挙げている (Defoe [1727], Supplement, pp. 33-34)。

33 Defoe [1727], Supplement, p. 33.

上記の Defoe の言葉を裏返せば、信用取引こそが組織的な会計 (systematic accounting) を生み出したといえることができる。事実、複式簿記も、その中核を構成する勘定組織は、他者との債権・債務関係を記録する人名勘定から生まれ、物財勘定、さらに、名目勘定が工夫・考案されることにより、その体系化が完成されたものと考えられる (Yamey [1949], p. 103; 小島 [1965], 第 4 章第 I 節・第 II 節)。

カテゴリーに属する所有物)の棚卸を行い、それらが合計いくらになるかを調べればよい。それが彼の全財産であり、純財産である。なぜなら、彼は誰にも債務を負わず、誰も彼に債務を負っていないので、彼のすべての財産は店の中にあるから……³⁴」である。

しかし、もし信用取引が導入されるならば、「商売全体がきわめて小規模で、あらゆる事柄を記憶することができる人たちを除けば」³⁵、「帳簿こそが、……彼(トレイズマン)に対して、彼の外部の債権 (debts abroad) の状態がどうなっているかという問いに十分に答えてくれるであろう」³⁶といわれる。いうまでもなく、正確かつ規則正しく記帳された帳簿だけが、かかる債権(債務)の存在を証明する唯一の手段ないし証拠となるからである。³⁷

VI

次に、Defoe が、トレイズマンによって実践されるべきものと教示している簿記の具体的内容について、その帳簿組織を中心に概観することにしよう。

彼はまず、簿記の教示を進めるにあたり、多様な国内商業に従事するさまざまなトレイズマンのうち、とりあえず小売商人 (shop-keeper or retailer)、特

34 Defoe [1727], p. 268.

もっとも、Defoe は、卸売であれ、小売であれ、信用を授受することなく、すべてを現金で処理しているような商人は、未だ生まれていないし、もしいたとしてもすべて死に絶えていると述べて、当時の商業世界における信用取引の普及と、それに起因する会計記録技術としての簿記の不可避的必要性を強調している (Defoe [1727], p. 268)。

35 Defoe [1727], Supplement, p. 34.

36 Defoe [1727], p. 267.

37 Defoe [1727], Supplement, p. 35.

Defoe は、帳簿を正確に記帳することが、トレイズマンの繁栄にとって不可欠の要素であり、帳簿をだらしなく記帳することは、帳簿をまったくつけないよりかえって悪いということを指摘している。そして、フランスや他の国の例を引いて、これらの国では、商人が帳簿をつけないことは犯罪とされ、帳簿を正確かつ適切に記帳していない人は、詐欺的意図があるものとみなされると述べて、イギリスのトレイズマン達に対しても、とりわけ債権(債務)にかかわる紛争を防ぐ意味から、帳簿を正確につけることを求めている (Defoe [1727], p. 267; Supplement, pp. 34, 96)。

38 「トレイズマン」に関する Defoe の定義については、前掲の注17を参照されたい。

にロンドンのシティに大きな店を構えた大規模な小売商人を例に取り上げてい³⁹る。

では、かかるトレイズマンにとって、どのような種類の帳簿が必要とされるのであろうか。

Defoe は、現金出納帳 (Cash-book or Great Cash-book), 日記帳 (Daybook or Journal), および、元帳 (Ledger) を機軸に、さまざまな補助的帳簿から構成される帳簿組織を提示している。

彼によれば、「小売商人の簿記の主要部分は、彼の貨幣に関して正確でよく貸借平均された勘定をつけることである⁴⁰」とされ、それゆえに、「現金出納帳を記帳することは、トレイズマンの業務のもっとも細心の注意を要する部分である⁴¹」といわれる。

次頁の〔例 1〕は、現金出納帳の記帳内容を例示したものである。⁴²

この例示からも明らかなように、現金出納帳には、まず前月からの繰越額が「現金：借方」(Cash Dr. (=Cash is Dr.)) と題された左側の冒頭に記入されるとともに、同じく借方側に、売掛金や手形金額の回収、小口の現金販売その他による現金収入額が記入される。他方、「現金：貸方」(Cash. Credr. (=Cash is Cr.)) と題された右側には、買掛金や手形金額の決済、賃金・家計費・諸経費、さらに、小口現金係である徒弟への補給などに伴う現金支払額が記入される。そして、月末に至って、1 か月間 (この例では 1725 年 1 月) の現金収入額 (借方合計額) から現金支払額 (貸方合計額) を控除して、当月末の現金残高 (£824) が算出される。

なお、現金出納帳については、小口現金の受払いをいちいち記入することは

39 Defoe [1727], Supplement, pp. 37, 43.

40 Defoe [1727], Supplement, p. 37.

41 Defoe [1727], p. 279.

Defoe は、「貨幣こそは商業の源 (principal) であるので、現金出納帳はあらゆる勘定の出发点になる」と述べている (Defoe [1727], Supplement, p. 92)。

42 See Defoe [1727], Supplement, pp. 46-67.

【例1】現金出納帳の記帳例示

January		Anno 1725.	
Cash Dr.		Cash Cred ^r .	
	l. s. d.		l. s. d.
Sat. Jan. 1.			
To the ballance of the last month's Cash, being so much remaining in hand, Decemb. 31st.	347 18 00	1. By John Indico Dyer, paid him in full	113 00 00
1. To John Jennings of Nottingham, per Bill on Jer. Palmer, receiv'd this day	160 00 00	By Tim. Drawboy Weaver paid him	70 00 00
To W. Thomas on account, -	35 00 00	By Mary Thomas, Mackler	32 00 00
To the Lady Jeffrey, sent by her servant, -	31 10 00	By Jam. Webb, Camblet-weaver	53 00 00
To James Scrooby, -	11 02 00	By Pocket expences given for Box money	13 07 00
To retail Cash, being money taken in the Shop this day, tho' New-year's day	33 17 06	By Sir Fra. — for one Quarter House Rent, due at Christmas last	52 10 00
		.	
		.	
		.	
	1064 12 06		816 19 00

(中略)

Cash Dr.		Cash Cred ^r .	
	l. s. d.		l. s. d.
To the foot of the former Page brought forward, being so much receiv'd this month	5997 02 00	By the foot of the Credit in the former Page, being for money paid on sundry accounts	6077 12 10
31 To John Saunders of Reading	21 13 00	31 By Abel Wilcocks, Weaver	71 10 00
To Retail Cash this day, being for the Holyday (King Charles's Mart) -	7 13 00	By Rob ^t . Petty, ditto. —	21 00 00
To Timothy Bubble, Broker, For 1000 l. South-sea-Stock sold for me at 106 per Cent.	1060 00 00	By Jasper Manly, for a Bale of thrown Silk	147 10 04
To Jeoffry Williams, receiv'd of him	90 03 00	By petty Cash to Tho. Scot, as per his Account this Week	14 02 08
		By petty Expence given Eleanor Morton, Poundage for a strange Lady she brought	1 12 00
		By Timothy Blount, Weaver, in full	19 03 02
Total receiv'd	7176 11 00	Total paid	6352 11 00

	l. s. d.
Receiv'd	7176 11 00
Paid	6352 11 00
Ballance in Cash	824 00 00

当該帳簿の記帳内容を煩雑にするということから、次頁の〔例 2〕に示すような小口現金出納帳 (Petty Cash-book) の利用が推奨されている。⁴³

小口現金出納帳は、当該例示から示されるように、週 (土～金) を単位として処理されているが、小口現金の補給に関しては、定額 (この例示では £5) を随時に補給するという形で行われている。しかも、週の途中では補給された金額を超える小口現金の支払が記録されており、これを週末に精算 (ballance) するという形で「小口現金勘定」 (= 小口現金出納帳) が締め切られる。

Defoe はまた、「トレイズマンは、現金について正確に記帳することに続けて、信用で売買したすべての商品に関する正確な記録をつけることに主として携わる⁴⁴」という。そして、このような商品の信用取引に伴う債権 (債務) の記録を担うのが、彼の説く帳簿組織における日記帳である。

〔例 3〕(82 頁) は、かかる日記帳における記帳関係を示したものである。⁴⁵

この例示からも明らかなように、日記帳には、トレイズマンが携わった商取引が、売買の別や取引金額だけでなく、取引相手、商品の種類・数量・単価といった明細も併せて、その発生順に記入されており、その意味で、当該帳簿は、取引の日記ないし日誌 (Day-book or Journal) としての性格を有している。⁴⁶ ただし、そこに記録されたのは、先に述べたように、信用取引に伴う債権・債務に限られており、この点で、複式簿記の帳簿組織 (特に三帳簿制) における日記帳 (Waste-book or Day-Book)、まして仕訳帳 (Journal) とは内容を大きく

43 Defoe [1727], Supplement, pp. 41-42, 72-73; see [1727], Supplement, pp. 74-89.

44 Defoe [1727], Supplement, p. 37.

Defoe はまた、「トレイズマンの仕入先は誰もが彼の債権者となり、売上先は誰もが彼の債務者となる。これが彼の簿記の骨子 (sum) であり本質 (substance) である」と述べて、信用取引に伴う債権 (債務) の記帳こそが、トレイズマンの簿記の核心であることを改めて強調している (Defoe [1727], Supplement, p. 42)。

45 See Defoe [1727], Supplement, pp. 99-105.

46 なお、Defoe は、現金出納帳には当初保有している貨幣を記入すべきであると様にも、日記帳にもトレイズマンが取引のために店や倉庫に在庫しているすべての商品を最初に記入すべきであると説いている。ただし、彼が示す記帳例示では、現金出納帳と日記帳のいずれにもこの種の記入は見出されない (Defoe [1727], Supplement, p. 98)。

〔例2〕小口現金出納帳の記帳例示

Account of petty Cash.

Petty Cash Dr.

Saturday, January 1. 1775.

	l.	s.	d.
To my Master's Cash, being so much put into my hands for ordinary Expenses	05	00	00

Monday, January 3.

To my Master, for more money receiv'd of him	05	00	00
	10	00	00

Petty Cash Credr.

Saturday, January 1. 1775.

By sundry payments as follows.

	l.	s.	d.
To the Drummers, given by my Master's orders	00	02	06
To the five Parish Alms-men, who come yearly, by Order	00	05	00
To poor Amy, an Old Nurse	00	02	06

Monday, January 3.

For a Messenger to Chelsea	00	01	06
For Carriage of Goods from Canterbury	00	17	03
Charges at the Custom-house for three Bales from Leghorn, as by the particulars given my Master	03	18	00
For Post Letters	00	01	09
	06	19	01

(中略)

Petty Cash Dr.

	l.	s.	d.
Brought over	10	00	00

Petty Cash Credr.

	l.	s.	d.
Brought over	09	11	02

Wednesday, Jan. 5.

To a Porter from Madam Le Force	00	01	00
To the news Woman for Papers, order'd to be taken in	00	02	03

For a paring Shovel, the old one broken, by Order	00	01	04
	11	15	03

(中略)

Petty Cash Dr.

Friday Jan. 7.			
Receiv'd of my Master to balance my Week's Cash	03	07	04
	13	07	04

Petty Cash Credr.

Friday, Jan. 7.			
Foreign Letters	00	07	09
Home Post Letters	00	03	00
	13	07	04

〔例3〕日記帳の記帳例示

The Journal, or The Day-Book

Being daily Entry of all the Goods, of
what kinds soever, bought in, or sold
out, and delivered out upon Credit,
by me, or my Order, and on my Account;
beginning this 1st day of January,
Anno 1725 inclusive.

Anthony Goodstock.

Saturday, Jan. 1. 1725.

Sold to Mr. Francis Kidd of Exeter, Mercer.

1 Piece fine Ital. Mantua, containing 62 yards, at 6s. 6d. p. yd. _____	}	20 03 00	
1 Piece fine black Velvet, cont. 23 yards, at 22s. 6d. p. yard, _____	}	25 17 06	
1 piece fine Brocade, hal- sell, cont. 20 yds. at 18s. p. yard, _____	}	18 00 00	64 00 06

Deliver'd per me, to himself,
at the Castle in Wood-
street,

Nich. Cawlay.

----- (中略) -----

Monday, Jan. 3. continued.

Bought of James Gouck, Weaver.

60 yards fine Garden Sattin made to my draft, at 9s. 6d. per yard, _____	}	1. 28 10 00	
84 yards ditto, of the sec- ond pattern, at 7s. per yard, _____	}	29 08 00	
120 Yards crimson flower'd Damask, at 11s. 6d. _____	}	69 00 00	
		<u>1. 127 18 00</u>	

異にしている⁴⁷。

彼は、日記帳についても、現金出納帳の場合と同様に、次頁の〔例4〕に掲げるような、小口取引を記録するための小口債権日記帳 (Small Debt Day-book or Petty Debt-book)⁴⁸ の使用を説いている。

さて、Defoe は、先に言及した現金出納帳を簿記における最初の帳簿と位置づけるとともに、その最後の重要な帳簿として元帳を位置づける。なぜなら、あらゆる帳簿がそこに集中されるからである⁴⁹。

〔例5〕(85頁)は、元帳の記帳関係を例示したものである⁵⁰。

この例示からも示されるように、元帳にはトレイズマンが売買している取引先の人名勘定が設けられ、現金出納帳と日記帳に記載の該当事項がそこに転記される。例えば、〔例5〕における「James Collier の勘定」では、借方側には、彼に対する売上債権が、日付、簡単な摘要、転記元の日記帳の丁数、金額の順に記載され、他方、貸方側には、債権の回収が、日付、摘要、転記元の現金出納帳の丁数、金額の順に記載されている。そして、借方合計額から貸方合計額を控除して残高が計算されている。

このように、元帳は、Defoe によって、トレイズマンが彼の身代 (substance)⁵¹を確認する際に頼みにするといわれるが、上述の記載内容からも明らかに、そこには人名勘定のみが収容され、複式簿記における元帳(=総勘定元帳)のような機能は果たすべくもなく、それが、別名、債権帳 (Debt-book)とも呼ばれるように⁵²、あくまでも信用取引に伴う債権とその回収、債務とその

47 日記帳→仕訳帳→元帳という三帳簿制は、Paciolo の「簿記論」(1494)以降、複式簿記を説く教科書で用いられた基本的帳簿組織であり、Defoe の『完全な商人』の出版からほどなくして登場し、伝統的な複式簿記(=イタリア式貸借簿記)を教科書的に体系化した代表的著作とされる John Mair の『組織的簿記』(*Book-keeping Methodiz'd*. 1736)もまた、基本的にはかかる三帳簿制の体系を踏襲している (Mair [1736], pp. 2-4; cf. [1736], Appendix, Ch. I; see 小島 [1987], 第15章第4節-2; 中野 [1992], 第4章-Ⅲ)。

48 See Defoe [1727], Supplement, pp. 108-113.

49 Defoe [1727], Supplement, pp. 123-124.

50 See Defoe [1727], Supplement, pp. 128-141.

51 Defoe [1727], Supplement, p. 123.

[例 4] 小口債権日記帳の記帳例示

January, Anno 1725.

Goods sold, not being paid for at the time of the delivery, as follows (viz.)

1. To W ^m . Bland at St. Katherine's		
1 pair of Men's Buck	}	1. 00 05 00
Skin Gloves		
1 pair of Woman's Lamb	}	00 02 00
Gloves		
		1. 00 07 00
To Mr. John Pied, 1 pair of white Lamb	}	00 01 02
Gloves		
To Mr. John Degroe, 6 pair of white Lamb	}	00 07 00
Gloves at 1s. 2d. per pair		
3. To Mr. Williams's Daughter, 2 Yards of	}	00 10 06
Muslin, at 5s. 3d. per Yard		

To W ^m . Hallom, Esq:		
2 fine Turn Overs,	}	1. 00 13 00
at 6s. 6d.		
1 Silk Handkerchief		00 05 06
1 pair white Gloves		00 01 02
		1. 00 19 08

[例5] 元帳の記帳例示

Fol. 10

		Jour.	1. s. d.
1725	James Collier, Dr.	fol.	
Jan. 10	To a parcel sent him as per Jour. _____	17	142 17 00
19	To Ditto _____	22	83 11 06
28	To Ditto _____	31	7 04 10
Feb. 16	To Ditto _____	50	120 06 06
Mar. 12	To Ditto _____	73	97 13 00
1726 27	To Ditto _____	91	28 03 07
Apr. 27	To Ditto _____	112	173 12 05
May. 9	To Ditto _____	122	72 15 02
			826 04 00

Eight hundred, twenty and
six pounds, four shillings.

		Cash book fol.	1. s. d.
1725	Per Contra _____ Cr		
May. 4	By Cash recd. per Bill, as per Cash-book _____	32	100 00 00
June. 12	By Cash of himself _____	36	42 15 00
Aug. 2	By Ditto _____	40	152 00 00
Sept. 10	By Bill on Tho. Webb _____	44	80 00 00
Nov. 6	By Ditto on the Bank _____	52	50 10 00
			425 05 00

By his Credit in a new
account to Ballance 400, 19 00

826 04 00

Eight hundred, twenty and
six pounds, four shillings.

(中略)

		Cash Book fol.	1. s. d.
1726	W. Low of Bristol, Dr.		
Mar. 25	To Cash paid his bill	13	50 00 00
Apr. 8	To Ditto _____	15	20 00 00
17	To Ditto _____	16	15 00 00
May. 2	To Ditto _____	18	30 00 00
. . .	. . .	. . .	. . .
Sep. 2	To Ditto _____	34	50 00 00
			825 00 00
30	To Cash paid himself in Town to Bal. all Acc ^t .	35	21 05 07
			847 05 07

Eight hundred, forty seven
pounds, five shillings and
seven pence.

1725	Per Contra	_____ Cr	Jour.	1. s. d.
		_____	fol.	
Jan.	7	By Goods rec ^d from him	14	137 15 06
	14	By Ditto _____	28	153 2 06
Feb.	3	By Ditto _____	39	117 12 00
	17	By Ditto _____	58	94 13 07
Mar.	10	By Ditto, by Ship _____	67	160 12 00
Apr.	2	By Ditto _____	102	83 10 00
				847 5 07

Eight hundred, forty seven
pounds, five shillings and
seven pence.

支払の状況を表示する帳簿にすぎなかったのである。⁵³

Defoe はまた、上記の帳簿群以外に、トレイズマンの業務が大規模で多忙なため、日記帳に記入する時間もないような場合に、あとで正式に日記帳に記入するまでの間、一時的に取引の記録を保持しておくための備忘帳 (Blotting-book or Minute-book)⁵⁴ や、将来起きるかもしれない紛争に備えて、受注の証拠となる顧客からの手紙を保存するための手紙控え帳 (Copy-book for Letters)⁵⁵、手形、特に手形の引受けを記録しておくための手形帳 (Bill-book)⁵⁶、さらに、火災により商品のみならず帳簿を失うことにより被る損失を防ぐための元帳の写しのないポケット元帳 (Duplicate or Pocket Ledger)⁵⁷ の利用が説かれている。

VII

叙上のように、Defoe が、『完全なイギリス商人』の中で、若いトレイズマンにとって必須の知識であることを強調しながら、その一部を割いて教示していた簿記にあっては、現金出納帳、日記帳、元帳がその帳簿組織の機軸にすえられている。ただし、現金の動きを把握する現金出納帳はともかくとして、彼の説く日記帳は、複式簿記の帳簿組織における日記帳、つまり、商人に生起する大小すべての取引を詳細に叙述形式で記録する原初記入簿としての役割をも

52 Defoe [1727], Supplement, p. 123.

53 なお、勘定の締切に関して、Defoe は、「少なくとも 1 年に一度財産と損益の勘定を恒常的に締め切るとは、イギリスのトレイズマンの古くからの賞賛すべき慣習であった。一般にそれはクリスマスか新年に行われた。その時、彼らは、後退したか前進したか、彼らの事業がこの世の中でどのような状態にあるかを常に語ることができた。この良い慣習はトレイズマンの間ではほとんど失われているが、今でもそれを行っている多くの人達がいる。彼らはそれを『棚卸』(casting up shop)と呼んでいる」と記している。そして、具体的な元帳上の人名勘定(債権・債務勘定)の締切について、彼は、例えば、年末に田舎の取引先が町にやって来たときに決済が行われ、古い勘定が締め切られて新しい勘定が始められるが、完全に決済されない場合には残高のみが新しい勘定に繰り越されると述べている。ただし、いわゆる決算手続についてはほとんど解説されていない。(Defoe [1727], p. 266; Supplement, pp. 142-146).

54 Defoe [1727], Supplement, pp. 42-43, 114-117.

55 Defoe [1727], Supplement, pp. 118-119.

56 Defoe [1727], Supplement, pp. 119-121.

57 Defoe [1727], Supplement, pp. 146-148.

たず、その機能は信用取引に伴う債権・債務の記録のみに向けられていた。また、元帳も、商業簿記の勘定組織の要をなす商品勘定や、収益・費用の勘定、資本勘定などを欠き、人名勘定のみを収容した帳簿、つまり、実質的には債権（債務）帳にすぎなかった。

すなわち、彼が『完全なイギリス商人』の中で教示していた簿記の実態は、既にその当時、大陸からイギリスに伝播していた複式簿記、つまり、実在勘定と名目勘定の統合（integration of real and nominal accounts）に基づく自己完結的な勘定組織を中核に、すべての取引を完全に複記するという意味での組織的簿記からは程遠く⁵⁸、現金と信用取引の管理を中心とした簡易簿記（単式簿記）の段階にとどまっていたのである。

このように、彼が、組織的簿記としての複式簿記を説かず、あえて簡便な単式簿記を教示した背景には、当時の簿記書では複雑な複式簿記の解説が紙面の大半を占めていたにもかかわらず、実際には単式簿記の方が商人達の間で一般に利用されていたという認識が存したものと思われる。少なくとも海外貿易に比較して相対的に小規模な国内商業に携わるトレイズマンにとって複雑な複式簿記は必要ないと考えられたのであろう⁶⁰。

58 小島 [1965], 30-31頁; see Littleton and Zimmerman [1962], pp. 26-27, 30-31.

59 Basi S. Yamey は、「実際、大多数の企業は、19世紀もかなり経過するまで、より複雑な複式簿記法の解説が教科書の紙面の大半を占めていたにもかかわらず、単純な記録作成の形式（便宜上、単式簿記と呼ぶもの）を用いていたに違いない」ということを指摘するとともに、オランダ東インド会社や、サン火災保険会社（Sun Fire Insurance Office of London）、キャピタル・カウンティーズ銀行（Capital and Counties Bank）といった当時の資本主義的企業の代表例ともいえる企業もまた複式簿記を採用することなく長期間にわたり存続したことを併せて指摘している。すなわち、彼によるならば、複式簿記の本格的な普及は、自生的に工業化（Industrialization）の過程を展開させたイギリスにおいても、(1)株式会社企業の増加、(2)所得課税の実施、(3)会計専門職業人による唱導といった要因を背景に、19世紀、それも後半のこととされるのである（Yamey [1949], p. 105; [1956], p. 11; [1964], p. 126）。

60 16～18世紀のイギリス商人にあっては、営利の追求という彼らの目的からみて、損益の把握に簿記の最大の関心があったということは当然のように考えられる。しかしながら、彼らの残された会計帳簿からみる限り、たとえ彼らが複式簿記を採用している場合であっても、帳簿記録に基づく損益計算は副次的、極論すれば、個々の商品勘定ないし元帳全体の締切に伴う副産物にすぎなかった。むしろ、簿記は、経営活動の管理計算の把握、つまり、単独もしくは他者と共同で、あるいは、

いずれにせよ、商業実務に携わった経験をもち、当時の経営学入門書とでもいふべき『完全なイギリス商人』を公刊した Defoe が、その有する会計の知識を、小説『ロビンソン・クルーソー』の著述にも生かしたということに何の不思議もないであろう。かかる知識こそ、Crusoe に限らず、われわれ個人や企業（法人）が置かれている状況を体系的に捕捉し、適確な意思決定を下すために必要な情報を提供するものである。このような認識のゆえに、Defoe は、『ロビンソン・クルーソー』の中で、Crusoe が「絶望の島」で置かれた境涯を客観的に描写し、これを読者に効果的に印象づける手段として会計的表現を用いたものと考えられる。

(1994. 09. 01, Urbana)

参 考 文 献

天川潤次郎 [1953 a] 「デフォウの商業論」論叢（関西学院短期大学商科），第 7 号，19-52 頁。

—— [1953 b] 「デフォウの『完全なイギリス商人』」論叢（関西学院短期大学商科），第 8 号，21-54 頁。

—— [1964] 『『ロビンソン物語』における宗教倫理と経済』経済学論究（関西学院大学），第 17 卷第 4 号，25-61 頁。

—— [1966] 『デフォー研究——資本主義経済思想の一元流——』未来社。

大塚久雄 [1966 a] 『『経済人』のユートピア的具象化としてのロビンソン物語』，大河内一男先生還暦記念論文集刊行委員会編『古典経済学の伝統』（大河内一男先生還暦記念論文集 第Ⅲ集），有斐閣，1966 年，155-183 頁。

—— [1966 b] 『社会科学の方法——ヴェーバーとマルクス——』（岩波新書）岩波書店。

—— [1977] 『社会科学における人間』（岩波新書）岩波書店。

落合幸二 [1984] 『ロビンソン・クルーソーの世界』彩流社。

小島男佐夫 [1965] 『複式簿記発生史の研究（改訂版）』森山書店。

＼代理人として携わった取引と、そこから生じる債権・債務関係について包括的で秩序立った記録を保持することにより、それらを管理・統制することに主たる目的が置かれていた。その限りにおいて、簿記は、Defoe が説くように、債権・債務と現金取引を記録する勘定（帳簿）さえあれば事足りたのである。大規模に営まれることの多い海外貿易と異なり、相対的に小規模な国内商業に携わるトレイズマンにとっては、特にそのことが妥当するように思われる（Yamey [1949], p. 105: see Yamey [1963]; [1964]; Winjum [1972], Chaps. VIII・IX）。

- [1987]『会計史入門』森山書店。
- [1988]「トレイズメンの勃興と簿記書の展開」会計, 第133巻第5号, 595-614頁。
- 高寺貞男 [1971]『会計政策と簿記の展開』ミネルヴァ書房。
- 高橋康雄 [1993]『ロビンソン・クルーソー本当の話』北宋社。
- 中野常男 [1992]『会計理論生成史』中央経済社。
- 宮崎孝一 [1991]『ダニエル・デフォー——アンビヴァレンスの航跡——』研究社出版。
- 山下幸夫 [1978]『近代イギリスの経済思想』岩波書店。
- Baladouni, V. [1986], "Financial Reporting in the Early Years of the East India Company," *The Accounting Historians Journal*, Vol. XIII, No. 1, pp. 19-30.
- Brown, R. (ed.) [1905], *A History of Accounting and Accountants*, Edinburgh.
- Defoe, D. [1719a], *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner: ……*, London (*Romances and Narratives by Daniel Defoe*, edited by Aitkin, G. A., Vol. I, London, 1895) (平井正穂訳 [1967]『ロビンソン・クルーソー (上)』(岩波文庫) 岩波書店)。
- [1719b], *The Farther Adventures of Robinson Crusoe: Being the Second and Last Part of His Life. ……*, London (*Romances and Narratives by Daniel Defoe*, edited by Aitkin, G. A., Vol. II, London, 1895) (平井正穂訳 [1971]『ロビンソン・クルーソー (下)』(岩波文庫) 岩波書店)。
- [1720], *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe: with His Vision of the Angelick World*, London (*Romances and Narratives by Daniel Defoe*, edited by Aitken, G. A., Vol. III, London, 1895)。
- [1722a], *The Fortunes and Misfortunes of the Famous Moll Flanders*, London (reprinted ed., London, 1930 (Everyman's Library, No. 837)) (井沢龍雄訳 [1968]『モル・フランダース (上・下)』(岩波文庫) 岩波書店)。
- [1722b], *A Journal of the Plague Year: ……*, London (reprinted ed., London, 1908 (Everyman's Library, No. 289)) (平井正穂訳 [1973]『ペスト』(中公文庫) 中央公論社)。
- [1727], *The Complete English Tradesman, in Familiar Letters: Directing him in all the several Parts and Progressions of Trade, ……*, 2nd ed., Vols. I-II, London (reprinted ed., New York, 1969)。
- [1728], *A Plan of the English Commerce. Being a Compleat Prospect of the Trade of this Nation, as well the Home Trade as the Foreign, ……*, London (reprinted ed., Oxford, 1928) (山下幸夫・天川潤次郎訳 [1975]『デフォー イギリスの経済の構図』(初期イギリス経済学古典選集5) 東京大学出版会)。
- [1745], *The Complete English Tradesman: Directing him in several*

- Parts and Progressions of Trade*, , 5th ed., Vols. I-II, London (reprinted ed., New York, 1970).
- Ellis, F. H. (ed.) [1969], *Twentieth Century Interpretations of Robinson Crusoe: A Collection of Critical Essays*, Englewood Cliffs, New Jersey.
- Green, M. B. [1990], *The Robinson Crusoe Story*, University Park, Pennsylvania
- 岩尾龍太郎訳 [1993] 『M. グリーン ロビンソン・クルーソー物語』 みすず書房).
- Hatfield, H. R. and Littleton, A. C. [1932], "A Check-list of Early Bookkeeping Texts," *The Accounting Review*, Vol. VII, No. 3, pp. 194-206.
- Littleton, A. C. and Zimmerman, V. K. [1962], *Accounting Theory: Continuity and Change*, Englewood Cliffs, New Jersey.
- Mair, J. [1736], *Book-keeping Methodiz'd: or, a Methodical Treatise of Merchant-Accounts, According to the Italian Form*, , Edinburgh.
- Malcolm, A. [1718], *A New Treatise of Arithmetick and Book-keeping*, , Edinburgh.
- [1731], *A Treatise of Book-keeping, or, Merchant Accounts; in the Italian Method of Debtor and Creditor*, , London.
- Moffit, L. W. [1925], *England on the Eve of the Industrial Revolution*, New York.
- Moore, J. R. [1934], *Daniel Defoe and Modern Economic Theory* (Indiana University Studies, Vol. XXI (Study No. 104)), Bloomington, Indiana.
- [1958], *Daniel Defoe: Citizen of the Modern World*, Chicago.
- Novak, M. E. [1962], *Economics and the Fiction of Daniel Defoe* (University of California Publications, English Studies: 24), Berkeley and Los Angeles.
- [1963], *Daniel Defoe and the Nature of Man*, London.
- Parkinson, J. M. [1986], "Daniel Defoe: Accomptant," *Accounting History*, Vol. VIII, Nos. 1 & 2 (reprinted in Boys, P. and Freear, J. (eds.), *Accounting History, 1976-1986: An Anthology*, New York, 1992, pp. 293-309).
- Sainsbury, E. B. [1932], *A Calendar of the Court Minutes etc. of the East India Company, 1671-1673*, Oxford.
- Stoler, J. A. [1984], *Daniel Defoe: An Annotated Bibliography of Modern Criticism, 1900-1980*, New York.
- Sutherland, J. [1971], *Daniel Defoe: A Critical Study*, Cambridge, Massachusetts.
- Thomson, H. W. [1963], "Bibliography: Books on Accounting in English, 1543-1800," in Yamey, Edey and Thomson [1963], pp. 202-224.
- Trevelyan, G. M. [1942], *English Social History: A Survey of Six Centuries Chaucer to Queen Victoria*, London (藤原 浩・松浦高嶺訳 [1971] 『トレヴェリアン 英国社会史 1』 みすず書房; 松浦高嶺・今井 宏訳 [1983] 『トレヴェリアン

ン 英国社会史 2』みすず書房).

Yamey, B. S. [1949], "Scientific Bookkeeping and the Rise of Capitalism," *The Economic History Review*, Series II, Vol. I. Nos. 2 & 3, pp. 99-113.

—— [1956], "Introduction," in Littleton, A. C. and Yamey, B. S. (eds.), *Studies in the History of Accounting*, London, pp. 1-13.

—— [1963], "Double Entry Practice in the Seventeenth and Eighteenth Centuries," in Yamey, Edey and Thomson [1963], pp. 180-201.

—— [1964], "Accounting and the Rise of Capitalism: Further Notes on a Theme by Sombart," *Journal of Accounting Research*, Vol. II, No. 2, pp. 117-136.

——, Edey, H. C., and Thomson, H. W. [1963], *Accounting in England and Scotland: 1543-1800*, London.

Winjum, J. O. [1972], *The Role of Accounting in the Economic Development of England: 1500-1750*, Champaign, Illinois.

